

ヘミングウェイ「老人と海」と安達征一郎「祭りの海」：カリブ海とトカラ列島のトポロジー

松下, 博文
筑紫女学園大学：教授

<https://doi.org/10.15017/4777918>

出版情報：語文研究. 130/131, pp.388-401, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

へミングウェイ「老人と海」と安達征一郎「祭りの海」

——カリブ海とトカラ列島のトポロジー——

松 下 博 文

0 はじめに

『老人と海』の舞台キューバと『祭りの海』の舞台トカラ列島は、北緯20度から30度の亜熱帯に位置し、キューバを流れるメキシコ湾流とトカラ列島を流れる黒潮はともに暖流の北赤道海流を源流とする。海域はサメの群棲域で前者では釣り上げたマリーン（マカジキ）を襲う獐猛な青ザメやメジロザメを餌とナイフで刺し殺すシーンが描かれ、後者ではつきまとうイタチザメをダイナマイトで吹き飛ばすそれが描かれる。本稿では、『老人と海』の主人公サンチャゴと『祭りの海』に登場する島袋幾三に焦点を当て、一九五〇年代、米ソ冷戦下の海域を漂う両者の在りようを地政学の視点から検証する。

I トカラ列島を漂うノマド——島袋幾三

北は種子島から南は与那国島まで南西諸島に弓状に広がる琉球弧の島々に、かつて、手漕ぎと帆かけのサバニひとつで海洋に漕ぎ出した漁民がいた。かれらは水中眼鏡を考案し、潜水を主とする「アギヤー」と呼ばれる大型の追込み網を駆使して、奄美、トカラ、種子島、屋久島、小笠原、壱岐、対馬、隠岐、若狭、新潟、あるいは台湾を経て東南アジア、フィリピン、ボルネオ、セレベス、マレー半島、さらにはハワイ、アメリカ、メキシコ、アルゼンチン、ペルー、キューバまでその足跡を残した。

安達征一郎はかれら糸満漁民のこうした漂海民の世界を、

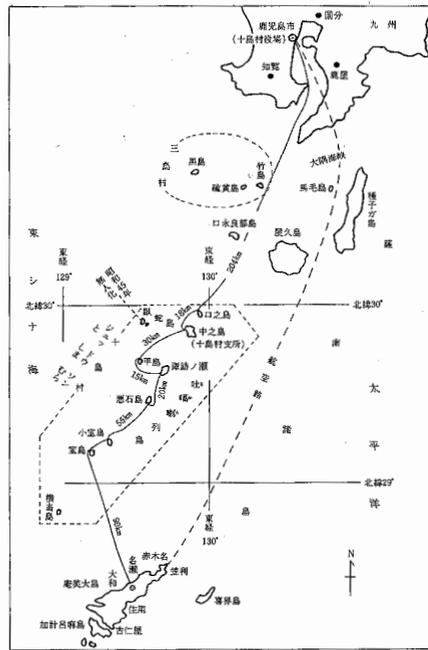
北緯29度と30度で切り取られたトカラ列島の島嶼空間に躍動的に描こうとする。『祭りの海』は87年8月に大阪の海風社から南島叢書版二冊本として出版された。

二冊本には78年9月に東京の光風社から単行本として刊行され第80回直木賞候補作となった『日出づる海 日沈む海』の全六章と、82年8月に海風社から単行本として刊行された『祭りの海』の全七章がそれぞれ独立して収録されている。

表題の異なる単行本を『祭りの海』という総題の下に前編と後編の二冊に分冊し上梓したのが南島叢書版である。テーマは滅びゆく糸満漁夫一行の葬送の挽歌。一行は、糸満漁夫大城組の長老大城朝賢を先頭に奄美大島古仁屋港からトカラ列島を横切って種子島西之表港まで三艘のサバニで航行する。

種子島——奄美大島間に位置するトカラ列島には、最北端の口之島から最南端の横当島まで有人無人の大小十二島が飛び石状に連なっている。地質学上は火山と隆起サンゴ礁、生物学上はいわゆる「トカラギャップ」と称される三宅線と渡瀬線の間にあり、民俗学上はヤマト文化圏と琉球文化圏のはざまに位置し、南島の異域と呼ぶにふさわしいマージナルな空間である。敗戦後の一時期、ここは、日本から切り離されていた。

46年1月29日、GHQ通告の「若干の外郭地域を政治上行



(トカラ列島・図版1)

政上日本から分離することに関する覚書」によって、30度以南のこの空間は米軍政下に編入された。対日平和条約調印にともない再び日本領に復帰したのが52年2月10日、この間、この海域は、闇取引の集散地として活気づいた。島々には無数の切り立った海岸、複雑な入り江、浅瀬と岩礁が複数点在し、こうした地理的悪条件が闇取引には好都合だった。島袋幾三はこの島空間に突如姿を現わす。

幾三は十五歳で糸満に売られた。糸満売りの第一の原因は社会の慢性的貧困である。糸満売りは人気があった。大地主

の家に身売りする下男奉公の場合、労務による返済は利子に相当する分だけであったが、糸満売りの場合、約十年間の労務提供で元金と利子を返済でき、しかも、漁労技術も獲得できるといふ利点があったからである。

糸満の掟は厳しかった。親方の命令に叛けば、「砂漬け」(砂浜に頭だけ出して一日中埋められる)「アダン責」(手足を縛り裸で鋸歯のアダンの茂みに投げ込まれる)「アンペラころろし」(アンペラに詰めて崖から転がされる)「沖棄て」(岸から数キロの洋上に棄てられる)の厳罰が待っていた。幾三はしかし平然とこれに従い、天文や帆走術を学び、一人前の海ヤカラー(海の勇者)として成長する。

年季が明ける十八歳の時、親方を「沖棄て」にして溺死させた。かれが幾三の同僚知名誠仁をサメの餌食としてホオジロサメのいる海中に放り投げたことが原因だった。糸満では疑似的な兄弟関係であれ、同僚同士は運命共同体的紐帯で結ばれている。幾三は誠仁と計り親方を「沖棄て」にし、そのままフィリピンへ逃亡した。厳罰に怯えたからではない。徴兵検査の適齢に達し、日本国民としての徴兵を拒否したかったからである。

・糸満から逃げたところで、いまの日本には自由はなか。(略)

徴兵検査を受けたら、わんたちは、間違いなく甲種合格だよ。それなら、親方のところから軍隊に住む場所をうつしただけのことじゃないか……わんは、自由のひとつかけらもない、そんな頭を押さえつけられる暮らしは真つ平だ！……だから、わんは、徴兵検査から逃げられないかぎり、逃げることに意味はないと思っているんだ。(「少年奴隸」)

年季明けと同時に(「甲種合格」)の兵卒として日本国家に拘束される——幾三のこの思いはおそらく沖繩の人々のそれを代弁している。沖繩への徴兵制実施は本土に遅れること二十三年、一八九六年(明治29年)、小学校教員にまず兵役が課せられた。教員が真つ先に兵役の対象となったのは、天皇に忠実な赤子として初等教育を通して皇民化を浸透させ、なおかつ軍事教育を普及させるためには、教育の担い手から国家に抱負する必要があるからである。しかし一般民衆の多くは徴兵を逃れるため、海外への移民・出稼ぎ・逃亡・自傷・詐病・障害者を装い、あらゆる手段で拒否姿勢をとった。フィリピンへの逃亡という幾三の選択もその一つである。しかしかれの真意は別にあつた。誰にもどこにも属さず無国籍者として自由に洋上を往来し、束縛のない自由な世界へ羽ばたくことである。

幾三はサバニと權さえあればどこにでも漕ぎ出してゆく。ゆえに「国民国家」の枠組みから容易に逸脱し浮遊する。これは線引きのない海洋を漂い、民族・国家・国境を無化し、ツリー状の国家的ヒエラルキーに囚われない。トカラに姿を現わした幾三を朝賢老人は次のように讚えた。

・糸満は昔から自由の民じゃった。いまでもその気概だけは持つちよるが、情けないことに、むしろは国のしめつけに負けて、ただの魚とりになりさがってしもうたわ。だが、幾三だけはちがうどう！ あいつは雲よ、渡り鳥よ、回遊魚よ。——まるで国境線が眼中にないんじゃからな。あれは国の許可なんか必要とせん——昔の糸満のようにな。行きたいと思つたら、身一つ、舟一つで、世界の涯へでも行ってしまうんだからな。糸満はああでなければいかん。糸満が海のうえの、見えもせん国境線にびくついていてるようじゃあ駄目なんじゃ。（「南から来た男」）

幾三は〈回遊魚〉のように〈海のうえの、見えもせん国境線〉を自由に往還し、「国境」という地政学上の空間をやすやすと越えていく。たとえば仲松彌秀「糸満町及び糸満漁夫の地理的研究」^(注1)によれば、30年代に海外雄飛を志し漁労に従事

していた糸満漁夫は、フィリピン、セレベス、ボルネオ、ジャワ、ニューカレドニア、フィジー、ハワイ、ブラジル、キューバ、ペルーまで及んでいたという。屋嘉比収「『海を歩く』人々の思想——糸満漁民考」^(注2)は、定住者の共同体から外れたこうした漁民の姿を漂泊者としての〈異人〉として捉え直すうとする試みだが、氏は糸満漁民の社会原理を「糸満漁民の共同体意識」「追込網漁の漁労組織」「移動分散型社会」という枠組みの中で検討しながら、かれらに《可能性において国家の成立原理とは異なつた社会の成立原理を保有する思想》があると指摘する。氏のこうした指摘は「祭りの海」を解説する際に極めて有効な視点を与えてくれる。

糸満漁民にとつて国家原理など無用である。その象徴的存在が島袋幾三だつた。幾三は徴兵検査を拒否し、サバニでフィリピンへ逃走し、そしてまた国境を越えて悠々とトカラ列島に姿を現わした。かれは強靱な肉体と大胆な行動力と独創的で攻撃的な漁労技術を駆使して、線引きのない海洋を自由に漂い、民族・国家・国境を無化して行く。後付けされるありとあらゆる制度に抗い〈自由の民〉（無国籍者）として漂流する。フェリックス・ガタリとジル・ドゥルーズの言説を借りれば、その姿は、前後左右・東西南北に自由に動き回る《リズム》であり、場所を転々と移動する《ノマド》である。

II カリブ海のトポロジ―

『老人と海』(The Old Man and the Sea)は52年9月、米誌「Life」に掲載され、翌年、ピューリッツァー賞、54年にノーベル文学賞を受賞した。日本では53年3月、福田恒存訳でチャールズ・イー・タトル商会から出版され、後に新潮文庫等に収録された。58年にはハリウッドで映画化され、老漁夫サンチャゴが繰り広げる巨大マリーンとサメとのダイナミックでステイティックな死闘を米国ミルウォーキー生まれのスペンサー・トレイシーが演じ、サンチャゴに寄り添う少年マノーリンをキューバ・ハバナ生まれのフェリペ・パズスが演じた。アメリカでは以下のように評価された。^(注3)

《こ、に示されたものは、人間の勇氣と誇りとさらに死の問題と、人間対自然の不思議な血縁の意識である》(ジョン・K・ハリス)《生と死、希望と絶望、恐怖と勝利、愛と憎しみ、それらが僅かに二百頁足らずのうちに描きつくされ、しかも数日に亘る老人サンチャゴの叙事詩的経験を通じて、その受難と克服とが静謐に述べられていく》(フアニイ・ブツチャー)《サンチャゴが最後に到達するところは、他の凡ゆるヘミングウェイの主人公と同様だ。激しい戦いを戦ひ、最後

まで耐へぬき、人間力の許すかぎりの偉大な行為をなしたといふ、矜持に満ちた静かな諦観がそれである》

以後作品の読みは、総じて上記の評価軸の延長線上に深化するが(〈生と死〉〈希望と絶望〉〈恐怖と勝利〉〈愛と憎しみ〉という背反する主体の心性を問う言説、〈矜持に満ちた静かな諦観〉という主体の形而上的な心性を問う言説、〈人間対自然〉〈叙事的体験〉という創作の時空間を神話的用語で説明しようとする言説)、作家論や作品論を含めてその膨大な研究事項は今日の課題を含めて『ヘミングウェイ大事典』^(注4)に集約され、整理されている。なかでも宮本陽一郎氏担当の「ポストコロニアリズム」の項目は『老人と海』をカリブ海世界から読み解く必然性を問い、極めて示唆深い。

《ヘミングウェイは、一九三九年以降、つまり人生のおよそ三分の一をキューバで過ごした作家である。それに先立つ一年間は、アメリカ合衆国南端のキーウエスト島で過ごしている。キーウエストの住民は、必ずしも合衆国に回取されない「コンク」という独自のアイデンティティを主張する。言い換えるならば、ヘミングウェイは人生の半分を、あるいは作家生活のほとんどをカリブ世界との関わりのなかで過ごした作家である。このように見るなら、ヘミングウェイを合衆国の作家としてのみではなく、ポストコロニアル批評の視座

から、〈植民地主義以降〉のカリブ世界の文学者の一人として再読することは、十分な必然性をもつ。ノルベルト・フエンテスの『ヘミングウェイ―キューバの日々』は、キューバ時代のヘミングウェイについての逸話を通じて、合衆国の研究者たちが看過していた、いわばもう一人のヘミングウェイの評伝を綴ったものである。このなかでフエンテスが、『誰がために鐘は鳴る』と『老人と海』をキューバの反植民地主義闘争と明確に結びつけるフィドロ・カストロの解釈を紹介するとともに、リサンドロ・オテロ (Otero, Lisandro) やメアリ・クルス (Mary Cruz) らによる、キューバのヘミングウェイ研究の系譜を紹介していることは貴重である。』

宮本氏はヘミングウェイがその生涯の三分の一をキューバで過ごしたことを重視し、かれをポストコロニアル批評の視点から米国作家ではなくカリブ海世界が生んだ作家として再評価し、こうした地平から『老人と海』を含めた諸作品を再読することの必要性を説く。知られるように『老人と海』はヘミングウェイの最後の小説であった。舞台はメキシコ湾流が流れるカリブ海、キューバである。

カリブ海はフロリダ半島の南に位置し、キューバ島、エスパニョーラ島、プエルトリコ島、ジャマイカ島の大アンティル諸島とプエルトリコ島東部からトリニダード島にかけて

の小アンティル諸島、それにバハマ諸島を加えて、七百以上の島嶼や岩礁群からなる。十五世紀末、コロンブスが到達して以来、カリブ海域は欧米列強の植民地と化した。現在は、旧宗主国のヨーロッパ系白人、奴隷として連れて来られたアフリカ系黒人、あるいは多種のメステイソ (混血) が住み、使用言語もスペイン語、英語、フランス語、オランダ語、フランス語系クレオール諸語、英語系クレオール諸語等、多様である。先住民のシボニー人 (漁労民族)、アラワク人 (農耕民族)、カリブ人 (農耕漁労民) は、宗主国によって持ち込まれた疫病やかれらによる過酷な労働により絶滅した。

(カリブ海・図版Ⅱ)



『老人と海』の舞台であるキューバは、米西戦争を経て02年にスペインから独立し、米国の軍政下に置かれた。爾来現在も、キューバ南東部にあるグアンタナモは共産圏やヨーロッパ列強を睨む軍事基地としてアメリカ海軍に租借されている。

ヘミングウェイは、39年、それまで生活していたフロリダ半

島南端のキーウエスト島を離れ、キューバのハバナ近郊で暮らし始めた。作家生活のほとんどをカリブ海世界との関わり
のなかで過ごすことになる。

主人公サンチャゴのルーツはどこだろうか。作品を読む限りはつきりしない。手がかりは、少年マノーリンとの会話やサンチャゴが夢や回想のなかで語る断片的な記憶のなかにしかない。①は中央アメリカのニカラグア、②③④はアメリカ、⑤はキューバでの出来事である（波線は任意）。

①「だって、お爺さんはモスキート海岸で何年も海亀とりをやつてきたけど、眼はともいいじゃないか」

②「俺がお前くらいの頃には、アフリカに通う横帆式の船で水夫をやつてたな。夕暮れ時には、砂浜にライオンが何匹もいるのが見えたものだ」

③老人はすぐに眠りに落ち、アフリカの夢を見た。彼はまた少年だった。（略）彼は夢の中で、打ち寄せる波の音に耳を傾け、その波をかき分けて進む先住民たちの舟を眺めていた。眠つていても、甲板からタールやマイハダの匂いが漂い、朝になれば陸風がアフリカの香りを運んでくるのだ。（略）老人は、夢を見続けることにした。海に屹立する島々の白い頂を眺め、カナリア諸島のいくつもの港や停泊地を通り過ぎていく。

④奴が眠ってくれたらいい。そうすれば俺も眠つて、ライオンの夢を見られる。彼はそう思った。なぜ俺の夢にはライオンだけが残つたのだろう。考えるな、爺さん。彼は自分に言い聞かせた。板にもたれてゆつくり休んで、今は何も考えないのがいい。奴は動いている。お前は、なるべく動かないようにするんだ。

⑤日が暮れると彼は、自信をつけようとして、カサブランカの酒場での出来事を思い起こした。波止場で一番強い、シエンフェゴス出身の黒人の大男と腕相撲をしたのだった。テーブルにチョークで引いた線の上に肘をつき、肘から先をまっすぐに立て、手を堅く握り合つて、二人は一昼夜も睨み合つた。

〈モスキート海岸〉はカリブ海に面した中米ニカラグアの海岸。長くイギリスの保護領であつた。〈カナリア諸島〉はアフリカ大陸の北西沿岸に浮かぶ群島。現在もスペイン領である。〈カサブランカ〉はハバナ湾の東側の都市、作品の舞台モデルである漁村コヒマルに近い。〈シエンフェゴス〉はキューバの中央部南岸にある都市である。――記述に従えば、サンチャゴは少年の頃に水夫としてアフリカに通う船に乗り込み、その後ニカラグアで働き、今はキューバの漁村で暮らしている、という設定になる。ただヨーロッパ系白人なのか、アフリカ

系黑人なのか、あるいはメステイソンなのか不明である。

会話はどうかだろう。スペイン語なのか、英語なのか、それともクレオール語なのか。原作も映画も英語だが、キューバの公用語がスペイン語であることを考えればスペイン語の話者と見るのが普通だろう（漁師という職業柄、その土地の方言スラングを使う話者かもしれない）。作品には十七カ所にスペイン語が使用される。すべて実生活に根差し、英語に取り換え不可能な語彙である。

サラオ (sabo 最悪の事態) グアノ (guano 棕櫚) ボデガ (bodega フインシヨップ) ケ・バ (Qué va とんでもない) ラ・マル (la mar 海・女性名詞) エル・マル (el mar 海・男性名詞) アグワ・マラ (agua mala 毒汁) コルデス (cordero 綱) プリサ (brisa 微風) ・カラムブレ (calambre 引き攣る) ・グラン・リガス (Granligas メジャーリーグ) フエゴ (Fuego 試合) ウナ・エスプエラ・デ・ウエソ (una esperra de hueso 骨の刺激) ・エル・カムペオン (el campeón 王者) ドラドール (dorado シイラ) ・ガラノー (galano メジロザメ) ・ティブロン (tiburón 鮫) サンチャゴのモデルとして、ハバナのサパタに住みヘミングウェイの持ち船ピラルグの最初の船長だったカルロス・グティエレスや二代目船長グレゴリオ・フェンテスが挙げられている。(注6) フェンテスは、カナリア諸島のランサローテ島出

身で、父をキューバに向かう途中に失い、成人するまで同郷のカナリア系移民に育てられた。グティエレスもフェンテスもスペイン語の話者である。

宮本氏の『モダンの黄昏 帝国主義の改体とポストモダンニズムの生成』(注6)によれば、ヘミングウェイは映画化に際しキヤスティングやロケ地や監督にかなりこだわっていたらしい。キヤストに実際のキューバの漁民を使い（前記のスペイン語の語彙もその現われか）、釣りの実写はペルー沖で行い、監督はネオ・リアリズムのスタイルを確立したイタリア出身のヴィットリオ・デ・シーカの起用を希望していた。しかしハリウッド側は、この希望を受け入れなかった。

監督はイリノイ州出身のジョン・スタージェス、老人サンチャゴにアカデミー主演男優賞受賞俳優のスペンサー・トレイシー、少年マノーリンに新人で英語がしゃべれるハバナ生まれのフェリペ・パズスを起用した。そしてハワイでロケを行い、マリーンとサメとの死闘はスタジオ内に設けられた水槽でフォーム・ラバー製のそれを使って撮影、英語のナレーションを入れ込み、孤独でエネルギーシユなアメリカ人の姿を映し出した。

映画が原作のデフォルメである以上、作品のフィクション化は避けられないにしても、ヘミングウェイの希望通りにキュー

バの漁民を使い、写実的リアリズムを追求していたなら、わたしたちの耳にはキューバ特有のスペイン語が飛び交い、眼にはエスノグラフィックなカリブの空間が映し出されていたにちがいない。

Ⅲ カリブ海を漂う異人——サンチャゴ

『老人と海』は50年代の世界的な植民地解放運動の只中で書き上げられた。合衆国メディアは異例の待遇でこの作品を肯定的に受け入れた。政治色が消されていたからである。宮本氏は『老人と海』受容に対するこうした米国メディアの反応を以下の三点に要約して見せる。^(注7)①人民戦線時代の知識人のソヴィエト共産党との関係を清算し冷戦構造を確定しようとする非米活動委員会の政治。②三十年代アメリカ文学の政治的なリアリズム小説を払拭した肯定的なアメリカ小説を待望するジャーナリズム。③神話批評を機軸としてアメリカ文学のカノンを形成しようとするアカデミズム。——傍証として作品が52年の大統領選挙（民主党候補アンドレ・ステイヴンソン、共和党候補ドワイト・アイゼンハワー）の真つ最中に、一挙に、文学を専門としない時事的な写真報道専門誌「Life」に掲載されたこと、掲載前から膨大な量が大手出版社

から売りさばかれることが決定していたことを指摘する。^(注8)

合衆国でのヘミングウェイのイメージはスペイン内戦を描いた『誰がために鐘は鳴る』以来、共産圏の臭いがつき纏っていた。『老人と海』には政治色がなかった。社会主義と資本主義という米ソ冷戦構造の対立のなかで、強いアメリカを代表する国民作家ヘミングウェイの、共産主義からの転向——こうしたイメージを合衆国メディアは発信しなかった。キューバに対し好意的だったヘミングウェイが合衆国に寄り添い、アメリカメディアによって合衆国に回帰したことを強く印象づける作品として『老人と海』は受容され、歓迎され、紹介されたということになる。

氏によれば一時期のアメリカ側のヘミングウェイ研究はノルベルト・フエンテス『ヘミングウェイ——キューバの日々』を除けば、ヘミングウェイとキューバの関係、とくにカストロ政権とヘミングウェイとの関係は、意図的に隠蔽されてきたという。^(注9)映画と同様、いわゆる文学研究においてもメキシコ湾流の北側（合衆国）と南側（キューバ）には南北の分厚い壁が立ちはだかった。カストロはむろん『老人と海』を『誰がために鐘は鳴る』の延長線上の政治小説として読んでいた。

かかる状況下、アーネスト・ヘミングウェイは『老人と海』の時代背景を一九五〇年、場所をカリブ海域、季節をハリケー

ンが多発する九月、時間をほぼ三昼夜の出来事に設定した。物語の中心は老人とマリーンとサメとの死闘である。ただこのダイナミズムは、メキシコ湾流とハバナの街と海上の風の向きによって演出されていることに留意すべきだろう。^(注10)老人は潮流と風の向きを長年の経験で把握しながら、洋上の自分の位置と出航したハバナの位置関係を頭に描いて、小舟を操る。時系列に沿って用例を示してみよう。①～④は一日目、⑤～⑧は二日目、⑨～⑫は三日目である(波線は任意)。

- ① うんと遠出をして、風が変りしだい帰ってくることにしよう。まだ夜が明けないうちに沖へでてしまうつもりだ。(略)老人はたえまなくゆつくりと漕いでいた。自分の力の範囲内で漕いでいる分には、たいした努力もいらぬ。(略)海面は板のように平らだった。老人は力の三分の一を潮流に預けていた。
- ② きょうは水面から見たところ、なにかも、北東に向つてすばやく動いているらしい。これは時刻のせいだろうか。それともおれの知らない天候のぐあいで、そうなるのだろうか。
- ③ 「もうちよつと食いついてくれ、がっぷり食らいつけ」(略)引きが来ると、かれはぐつとうしろに反った。い

つまにか舟は北西に向つてゆるやかに流れていく。魚はすこしの乱れも見せず、じつくりした調子で泳ぎつづける。(略)四時間たつても魚は相変らず悠々と、小舟をひきながら、沖に向つて泳いでいた。

- ④ ふと、うしろをふり向く。もう陸地は見えない。(略)おれはいつもハバナの空の明るみをたよりに帰つてくることが出来る。(略)舟は潮流に押されて、いくぶん東のほうに進んでいるらしい。もし、ハバナの空の照りかえしが見えなくなりでもしたら、舟はもつと東に方向を転じたことになるだろう。

- ⑤ あたりがほんのり白んできた。(略)舟は相変らずじつくり海面をすべっていた。「やつ、北に向つて進んでるな」と老人はいった。それにしても潮流のおかげで、おれたちはだいぶ東のほうへ押し流されるだろう。魚のやつ、潮流に乗つてくれるとありがたいんだがなあ。それがなによりへばつた証拠だからな。
- ⑥ しずまりかえつた海洋の不気味なうねりが見てとれる。貿易風にともなつて雲がむくむくと立ち昇りはじめた。(略)いまはハリケーンの季節だ。(略)ハリケーンが来るときは、何日も前から空にその兆候が現われる。沖に出ていさえすれば、すぐにそれがわかる。

⑦

ついに魚は姿を見せた。(略) 陸地も見えぬところで、かれはいま生まれてはじめて見る大魚に、じっと食いさがっているのだ。(略) 舟は暗い水の上をゆっくり動いていた。風が東から起り、海面がすこしうねりはじめた。(略) もう午後にはいつていた。舟は相変らずゆっくりと、そしてすこしの乱れも見せずに海面をすべっていく。しかしこんどは東の風が加わり、すこし抵抗を感じた。(略) 魚が北からすこし東のほうに方向を転じたことがわかった。

⑧

東のほう曇りはじめる。かれの知っている星がひとつひとつ消えていった。(略) 「こりゃあ、三、四日すると天気が悪くなるぞ」とかれはいった。魚のやつ、

⑨

白んできた東の空をじつとながめていた。魚のやつ、東に向っているな、とかれはおもう。疲れてきた証拠だ。潮といっしょに流れている。(略) 三度目の太陽が昇る。そのころになって魚はようやく輪を描いて回りはじめた。

⑩

「そろそろ、やつもあがってくるだろう」(略) 海面はかなり波だつてきた。だが、これは頼みになる風だ。これがなければ老人はひつかえせない。「船を南西に向けよう」とかれはいった。「海じゃ迷子になりつこな

い、キューバは長い鳥だからな」

⑪

魚はやつとかれのほうに泳ぎ寄ってくる。老人は綱を放し、片足でそれをおさえたかとおもうと、鉤を思いきり振りあげ、全身の力をこめて、しかもそれまで身うちに残していた以上の力をこめて、それをぐざりと魚の横腹に突きたてた。(略) 海は、心臓から吹きだす血のために、あたり一面、真っ赤に染まっていた。(略) へさを南西に向けた。コンパスなどなくても、老人には方角がわかった。貿易風が吹いていたし、帆のはらみかたを見れば、すぐわかる。

⑫

空高く積雲が見える。その上に巻雲が見える。このぶんでは夜どおし風は落ちないだろう。(略) 最初の鯨の襲撃が起ったのは、それから一時間のちのことだった。

一日目、湾流は北東に向って速く流れ、小舟は平らな海面を潮の流れにまかせて進んで行く。仕掛けの一本がヒットした。大きな当たりだ。魚は潮流に逆らって舟を北西に曳きずり、陸地も見えなくなった。老人はハバナの夜空の街の照り返しが気になり始めた。二日目、舟を曳く魚の勢いは衰えない。流れに逆らってまだ北に進んでいる。貿易風によつて雲が湧き、東から風も立ってきた。しずまりかえっていた海面

が不気味にうねる。魚は方向を北から少しだけ東へ転じた。東の方向が曇り始めた。三日目、魚はようやくややく潮流に呑まれ東へ向かう。風が出てきた。海面はかなり波だつてきた。魚も弱つてきた。舟を南西に向けた。キューバ島が頭をよぎる。魚は小舟の周りをぐるぐる回りながらついにその巨体を老人の前に現わした。巨大なマリーンだ。錨を全身の力を込めて横腹に突き刺す。真っ赤に海面が染まる。老人は大鱼を小舟に結わえ貿易風に乗る、南西の方向、ハバナを目指して帆船を始めた。空には積雲と巻雲が浮かんでいる。

一日目、魚は北東に向うメキシコ湾流に逆らい北西に進み、二日目の午後には北東に、そして三日目の明け方前には完全に湾流に呑み込まれ東向きになった。二日目から海上は不気味にうねり、雲が湧き、風が立ち、三日目には、海は荒れ、老人の眼には来るべきサメとの格闘を予兆するかのよう積雲と巻雲が映し出される。

老人が魚から主導権を取り戻したのは⑨⑩の場面、魚が潮流に逆らえず東に向きを変え始めた時点である。かれは舟の向きを「南西」に変えようとする。ハバナの方向である。そして死闘の末、大鱼を仕留める。しかしサメの波状攻撃に遭い、再びメキシコ湾流を漂い、カリブ海を帆走する。獐猛で賢いデンツーツ(青ザメ)や腐肉を好むガラノー(メジロザ

メ)による四回の襲撃と集団鮫による二回の襲撃——魚はそのたび喰いちぎられ最後には背骨と頭と尻尾だけの無残な骸と化した。その間、風は北東に変わり、次第に強まり、強風になった。しかし老人は洋上の自分の位置と潮流と風の向きとハバナの街をあたかも羅針盤のように測定し、湾流を巧みに捉えながら貿易風に乗る無事に母港ハバナに辿り着いた。かれは長年の経験則で自らを羅針化する。というより、「運」も含めて自然や人事のすべて、ひいては全方位までもがかれの磁力に引き寄せられたと言つてよい。

すでに指摘したように『老人と海』の評価は、〈生と死〉〈希望と絶望〉〈恐怖と勝利〉〈愛と憎しみ〉という背反する主体の心性を問う言説、〈矜持に満ちた静かな諦観〉という主体の形而上的な心性を問う言説、〈人間対自然〉〈叙事的体験〉という創作の時空間を神話的用語で説明しようとする言説、のなかで揺れていた。千葉兼太郎氏はこうした対立・矛盾の構造を原文に六ヶ所現われる「strange」の用例に見ようとした。氏はこれらの用例にはすべて超人間的なものを称える意味が含まれていると指摘する^(注1)。マリーンへの《尊敬と愛と憐み》が逆向きの殺意に転じる時、そこには常人をはるかに超えた強い力が要求される。そうした動態を示している語彙が「strange」だという。巨大なマリーンというバケモノに対峙す

るための超人間性——いいかえれば、サンチャゴは人為を超えた超人間的な「stranger」（異人）であり、「運」のみならずすべてを手練り寄せ、呑み込み、はては巨大魚を葬り、人喰いサメも葬る超人なのである。その姿はまさに「カリブ」（人食）そのものではないか。カニバリズムはスペイン語の「カニバル」に由来する。「canib」は先住民族のカリブ族のこと。エネルギーで動物的で荒々しい老人の姿は列強の植民地政策によって絶滅したかの農耕漁労民カリブ族の復活した姿であると見てよい（ただしサンチャゴは先住民の「カリブ族」と同質ではない。なぜならかれには殺戮に対してキリスト教に根差した罪意識が存在する）。

ヘミングウェイはサンチャゴと命名した老人をガルフ・ストリーム（メキシコ湾流）の外側に投げ出さなかった。マリオンやサメと格闘させながら回流する湾内を漂流させた。そしてカリブ海の大アンティル諸島の最も大きなキューバ島に無事帰還させた。そこにわたしはサンチャゴに託したヘミングウェイの強い意志を見たい。老人はキューバに帰属する。決して合衆国には回収されない。かれはキューバの民であり、カリブの民であり、そして人為を超えた超人（異人）なのである。

IV まとめ

敗戦直後の46年1月、北緯30度以南のトカラ列島の空間は米軍政下に編入され、52年2月までその支配は続いた。安達征一郎はこの時代のこの空間に糸満漁民を浮かべ、「国民国家」を無化し「国境」という地政学上の地理的空間を無化する島袋幾三を描いた。まったく同時期にヘミングウェイは、米ソ冷戦下の北緯24度のカリブ海キューバ島にサンチャゴを漂流させ、マカジキとサメとの死闘を演じさせた。幾三は黒潮に乗ってあらゆる制度に抗い「自由の民」（無国籍者）として漂流した。他方、サンチャゴは回流するメキシコ湾流に流され、「カリブの民」としてキューバに帰港した。

安達は日本とアメリカに回収されない自由人としての幾三を造型し、ヘミングウェイは合衆国に回収されないキューバの民（カリブ人）としてサンチャゴを造型した。かかる人物像の造型は、安達征一郎もアーネスト・ヘミングウェイも自らの「国民国家」（日本・アメリカ）に隷属していないということの意味する。そこに、一九五〇年代、米ソ冷戦下のアメリカに向き合う二人の作家の抵抗の姿勢が示されているのは明らかだろう。

注

- 1 仲松彌秀「糸満町及び糸満漁夫の地理的研究」(44年2月・「地理學評論」20巻2号・日本地理学会)
- 2 屋嘉比収「海を歩く」人々の思想——糸満漁民考」(90年3月・「新沖縄文学」83号・沖縄タイムス社)
- 3 「老人と海」表紙カバー」(福田恒存訳・53年3月・チャールズ・イー・タトル商会) 参照
- 4 「ヘミングウェイ大辞典」(監修今村橋夫／島村法夫・12年7月・勉誠出版)
- 5 ノルベルト・フエンテス『ヘミングウェイ——キューバの日々』所収「2 ガルフ・ストリーム」「6 老人と海」(宮下嶺夫訳・88年6月・晶文社) 参照
- 6 宮本陽一郎「モダンの黄昏 帝国主義の改体とポストモダン主義の生成」所収「第十章 老人とカリブの海——冷戦、植民地主義、そして二つの解釈共同体——」(02年4月・研究社) 参照
- 7 同6参照
- 8 福田陸太郎「解説」(『ヘミングウェイ全集7』(訳者代表福田恒存・73年12月・三笠書房)には当時の出版状況が次のように示されている。『老人と海』(The Old Man and the Sea)の初版は、ニューヨークのチャールズ・スクリブナーズ社から、一九五二年九月八日に刊行された。その発行部数は五万で、定価三ドルであった。ただし、初版本の出る十一日前にこの二万七千語からなる中篇小説の全文が、『ライフ誌』の一九五二年九月一日号に、二十ページにわたって掲載された。当時の『ライフ』の発行部数は、五、四四九、八三三部であったが、しかもこの雑誌の出る前に、ライフ社はこの物語のゲラ刷を、五、〇〇〇組も作って、前宣伝にバラまいた。なお、英国版の初版はジョンサン・ケイブ社から、同じく一九五二年九月八日に発売され、定価は七シリング六ペンスであった。』

9 同6参照

- 10 南谷覺正「『老人と海』について」(99年3月・「群馬大学社会情報学部研究論集」6巻)には『老人と海』において、「風」は隠れた構図となつて、顕れた海流に照応している」との指摘がある。また、「この物語の風も、どこか虚無の、敢えて言えば「死」の息吹を感じさせる」という。
- 11 千葉葉太郎「ヘミングウェイ・『老人と海』——存在と当為の分裂の極点」(64年12月・「茨城大学文学部紀要 人文科学」15号)の注42参照

* 『老人と海』の引用は新潮文庫(福田恒存訳・77年年8月37刷)を使用した。『安達征一郎蔵書目録(雑誌・文庫・単行本一覽)』(16年3月・松下博文編著・私家版)には同書が収められている。

* カリブ地域の地歴については『新版世界各国史25ラテン・アメリカ史I メキシコ／中央アメリカ／カリブ海』(増田義郎／山田陸男・99年8月・山川出版社)『世界現代史35ラテン・アメリカ現代史III メキシコ／中米／カリブ海地域』(二村久則／野田隆／牛田千鶴／志柿光浩・06年4月・山川出版社)を参照した。

* 「トカラ列島・図版I」は「離島トカラに生きた男・第一部」(編著者中野卓・81年10月・お茶の水書房 所収の「口絵2」)「カリブ海・図版II」は (<https://ameblo.jp/worldhistory-univ/entry-12029209716.html>) から引用した。

* 本稿は「新薩摩学 薩摩・奄美・琉球」所収(鹿児島純心女子大学国際文化研究センター編・04年12月・南方新社)の内容の一部を発展させたものである。

(まつした ひろふみ・筑紫女学園大学教授)